

古代中世以前の地方に於ける民間佛教史の研究

(特に但馬地方に現存せる佛教遺物を主資料として)

田 村 信 隆

但馬地方は一市五郡からなり、地形的にも頗る險阻な面を持つた隔地である。しかし斯うした地域に於ても中央文化の影響大なるものがあり、戦乱等幾多の被害を蒙つたとは云え、他の諸地方とは異つた多種多様の仏教遺物の現存を見る事が出来る。

従つて私は、斯うした面から地方仏教を究明したものであるが、この紀要に於ては特に論文中央三神に取上げた但馬の持つ仏教の特殊性に就いて詳らかにするものである。

高楠順二郎氏に拠ると法道は、天平以前に末朝した印度王舍城出身の僧で播州法華山寺(現在北條町法華一末寺)に住し印度慈圓精舎の守護たる牛頭天王を奉祈したと云われている。従つてこの法華山寺を中心とした教化は当然思考されるものであり、但馬地方に於ても特に法華山寺に近接した一郡(朝来郡)に限つて、法道建立の寺院寺趾七ヶ寺を数えている。これら寺院に現存せる遺物には、当時のものは現存しないが、少く時代を下つた遺物中には印度的風潮を思はせ、法道の影響を思惟するに足りる石仏の現存等興味あるものが窺われる。これは、朝来郡朝来町岩津菅原寺岩屋観音で俗に「サの高野」とも云われている。自然洞窟から成

リ 内部には金罍大日磨蓋と十五個の石仏が安置されて居り、何仏か不明の婆羅門的な像教体を
含んでいる。この内特に不動明王横脇に刻された釈迦入滅年代は非常に重要視されるものであ
り明記すれば次の如くである。

「釈迦入滅至永仁二二年丙申

二千二百二十五年也大工心阿 抄 孫

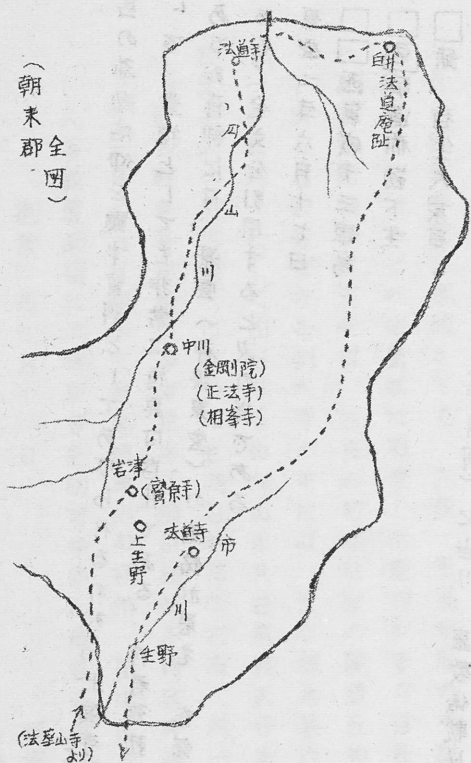
これに據ると釈迦入滅年代を間穆王五三年（BC九四九）に取つて居る事が明らかにされる。従つて
他の石仏も、これに前後して造像された事が考えられるものである。

法華山寺より中国山脈を横切つた谷伝ひの但馬に至る路程を概算すると、約十三里（五二・〇）
あり、周囲の状況からして特に法道はこの至路を取つたものと思考される。但馬朝末郡に於け

る法道の教化範圍を設定した因を示
すとの如くである。

（この因は法道建立の寺伝、寺院配
置から想定したものであるが、計
らずも谷伝ひの至路を明らかにす
る事が出来た）

この他往石隆盛を誇つた地方仏教を
窺うに重要な遺物が見られるがその
内、主なものを挙げて各々その解明
を試みよう。



また但馬の弥勒信仰を顕す資料としてあげられるのが「正福寺弥勒金銅仏」と「衆音寺一尊一仏互至」で、遺物としても非常に特異な存在である。前者弥勒仏は、全高三寸に満たない小形の像であるが背部には、景雲（神護景雲）の刻銘が見え、在銘のものとしては但馬最古を誇るものである。全文を引用すると次の様である。

「景雲二年六月十七日

景雲二年六月十三娘為

敬造弥勒下生

鋪 者生大家草し

景雲二年（40七六）は奈良末（天平年間）に当り、窠教儀軌以前のものとしても重華親される。これに拘ると十三娘の爲に弥勒の下生を願いつつ造像を成したものであり、当時既に充実した弥勒への信仰が確立されていたと見るには充分なものがあらう。

後者「一尊一仏互至」は「衆音寺互至」とも呼称され、弥勒坐世に重大な意義を持つ「埋至」を目的としたものである。この互至は表裏共横三段同型でしかも類型的な仏像（座像）五体が配され、その胸に至典中（観音至普門岳壽重岳を引用）の文字を一字宛陰刻したもので、完型を保った互至として唯一のものである。

又最近に至り右利進美寺境内附近より、これと同型の「互至破片」の発掘を見たが、陰刻された書体は全く異つて居り、二箇所での互至製作が試みられた事も考えられ、これら遺物から但馬地方に於ける弥勒信仰が如何に盛んであつたかが察知されるものである。

その他、但馬地方の仏教史考察上、多大の仏教遺物の現存を見るが、中央文化圏の影響を認

はせるものがあり、但馬の自然環境や民族性と相まつた山岳仏教の画期的な隆盛期をもたらした事が考察される。特に上代に於ては、天台、真言の発展と共に地方でも中央貴族、地方豪族を担那とする密教寺院の建立が目立ち、当代人の日常生活と共に仏像の造像等盛況を極めた事が考えられる。

斯くの如き当時の仏教状況は、後宇多天皇弘安八年但馬守護太田太郎左衛門尉政頼が、鎌倉幕府に注進した「但馬太田文」に見られる中央諸大寺の寺領收は形大に敬に上つてをり、斯うした面にも都との文化交流の一端が指摘されるものである。

申世に至ると、世情の動向に伴つて山岳仏教として発展した密教寺院は、庇護を失はなつて漸次衰微の一途を辿るが、頽廢した都に立教所泉を見た新興仏教が地方へも流入される市に於りこれら密教寺院を根城として、武家、庶民中心の布教伝道が行なわれる様になる。現在寺院中に密教像を始めその他密教に關連した遺物が多々存在する事等、又「昔天台也」「昔真言也」とある寺虎沿革は史等は、往古の地方仏教の隆盛を物語るものであろう。

しかしながら地方古刹大手の中には、更び鎌倉幕府の加護を受けた寺院が廻られる。「但馬唯一の名刹」として知られる比叡山末天台宗進美寺等がそれで、寺史として遺された鎌倉期の石文書（二巻六通）に於つても明らかにされる。内一通を上ぐれば次の如くである。

「但馬國進美寺家徒等申於當時領田畑等不可致押領狼籍由事。右寺者如右大將家御時連久五年五月十五日御下文看爲関東御祈禱所。國中在方大名等不可致押領狼籍處守護並地頭御家人等致違乱煩云云然則守先例可令停止彼輩等押領狼籍看依鎌倉殿仰下知如件

建長三年九月十八日

相模守平朝臣判
陸奥守平朝臣判

これによると、建久五年五月下文をもつて、鎌倉幕府の「関東御祈禱所」となっているが、これに従い、前記の下知状を下して守護、地頭、御家人等の追美寺の押領狼籍を禁じて、本寺の保護に努力してゐる事が解り、同時に於ても公武の尊嚴の辱かった事が知られる。以上の如き資料を中心に見ると、但馬地方の仏教は石代から中世に至るまで特に中央文化の影響大なるものがあり、その中に独自の発展過程を考察し得るものである。

註Ⅰ 兵庫県美方郡温泉町湯村天台宗（慈覺大師の建立とされる）

註Ⅱ 兵庫県朝来郡深瀬町衆音寺眞言宗

註Ⅲ 兵庫県城崎郡日高町天台宗追美寺行基（山頂に建立されて居り、景勝の地である事から「但馬の比叡」「山陰才一の名刹」として知られる）

後記（論文の一節よりその概説を試みにが枚数に制限を置いているのでまとめ方に違突あるも御許しを乞ふ）